

## 水交会会長在任中の思い出

(佐々木注) 2002年7月28日作成

原題「水交寄稿」A4版2ページ。

以下、原文をそのままA4版に変換し、欄外にページを付与したもの。

### 水交寄稿

中村悌次

私は平成二年五月から八年間、副会長次いで会長を拝命しました。就任に際し木山元会長から「水交会は奉仕の団体であること」「水交会の精神は国家興隆の基盤であること」等、水交会の存在及びその運営についての基本理念を承り、先輩の志を継承し発揚するよう努めました。が、微力ご期待に添うこと少なく、申し訳なく存じております。

在任中最も有り難かったことは、今日の社会風潮からすればまさに泥中の蓮とも言うべき、会員各位の真心——それはまさにこの基本理念そのものであります——に接し、自分の心を浄められる思いをしたことであります。

数多いその思い出の中でも、最も感動したのは、呂五百一潜乗田貞敏艦長夫人日出子様の真情一路、懐愴なまでの厳しい生き方を承ったことであります。日出様は昭和十九年夏、相次いで御尊父（サイパンで玉砕された高木武雄大将）と御夫君を失われ、戦後は女手一つの苦しい生活の中で御遺児を育てながら、御夫君と運命をともにされた五十余名の方々及びその御遺族のことを胸から放されることはありませんでした。

逝去されるまでの五十年間、一日も欠かさず、毎朝乗員の名前も祀った仏前で、一人一人のお名前を読み上げ、御冥福と御遺族の平安を祈り、節目節目には御遺族全員に慰問と激励の通信を続けて来られたのであります。そして逝去後、御遺族から夫人のお気持ちを最も活かすため、苦しい生活の中の涙と血の結晶ともいふべきその御遺産が、水交會に寄贈されたのであります。水交會では、そのお志に沿うべく乗田基金を作り、その果実を潜水艦関係の慰霊祭に奉納することにしました。不可抗力ともいふべき呂五百一潜の喪失に対し、艦長夫人が生涯を通じ、夫に代わりその責めを果たそうとされた純粋な責任感と真情こそ、今日の日本を照らす道しるべではないでしょうか。

会員の皆様の御熱意に感動したのは、平成六年、老朽した社屋を東郷記念館と協力して改修するため、整備基金を募集せざるを得なくなり、無理を承知の上目標を六千万円に設定したところ、目標を一割以上上回る浄財を寄せられるなど、絶大なご協力の得られたことであります。ことに御遺族や未亡人の会員の方々から、思いがけない多大のご支援のあったことには、深い感銘を覚えるとともに、ご期待の程が胸に応えたことであります。

水交會の会員の構成も、その活動も、いわゆる海軍三校の出身者、中でも終戦時在校中であつた方々に大きく依存していたのはいうまでもありませんが、それ以外の方々の地味な無私の奉仕にも何時も感銘を深くしておりました。今日も忘れられない多くの方々のうち、ほんの一例を挙げますと、病気を押しして最後まで編集委員長として尽力された河村幸一郎氏、長年にわ

たりクラブ運営その他に適切な助言と支援を惜しまれなかった芹川英夫氏、会勢拡充に努力を惜しまず大きく寄与された久野弘氏、総ての水交会の活動に率先して真摯な支援と協力を続けておられる土田八也氏 等には何時も無言の策励を頂く思いをしたものであります。

在任中の業務のうち最も力を注いだのは、水交会を永続させるため海上桜美会との一体化に道を開くことであります。その為には先ず水交会を厚生省所管の財団法人から、厚生省、防衛庁共管に変更して頂き、また寄付行為の目的、業務等を改訂する必要がありました。容易な仕事ではありませんでしたが、秋山理事長の執念ともいべき粘り強い真摯な努力と関係官庁の御理解、さらには木山元会長外各位の御支援が実って、実現の運びとなったことは本当に有り難いことであります。これよりさらに難しいことは、両会の会員特に海上桜美会員の方々に一体化して長く水交会を継承して行く意識とムードを醸成することと思われました。海軍と海上自衛隊と名も違い、環境も異なっても、同じ日本人が、海上防衛という同じ任務に挺身する以上、相通じ共通するものが多く、必ずや思いは通ずると信じつつ、無理を避け順を追って進めることにしておりましたが、その後関係者特に長田海上桜美会会長や吉田水交会会長の御尽力により、昨年一体化の実現したことは、喜びに耐えないところであります。

大きな行事としては、平成七年十一月、終戦（海軍解体）五十周年を記念して、海軍関係諸団体（水交会の外海軍三校各同窓会、海交会、各予備学生会、桜医会、及び技術各科、予科練、特年等の各会）及び海上自衛隊の現職、OB七百余名により「海軍を憶う集い」が、靖国神社、自衛隊殉職者慰霊碑及び明治記念館において盛大に実施されました。この集いは、秋山理事長以下を中心として、関係者の約一年半にわたる周到な準備をもって行われましたが、この間、ときに世代間の激論を生んだ率直な意見の交換と、決定したことについての全員一致結束しての整然たる実施は、まさに海軍の良い伝統そのものであり、海軍関係諸団体間、及び海軍と海上自衛隊間の一体感の醸成に大きく資したものであります。

特異な慰霊行事としては、豪州メルボルン郊外ウイリアムスタウン共同墓地の中にある三人の水兵の墓の再建と慰霊記念碑の建設があります。明治十五年練習艦筑波で死亡し手厚く葬られた篠原彦太郎、宮本治三郎、石橋辰四郎三人の墓が荒廃し撤去されようとしたところを、近くに住む親日家のデビッドソン夫妻（夫人は日本生まれの野口幸子さん）が発見し、日本総領事に連絡されました。外務省からの連絡によってこの事実を知った水交会では、外務省、海幕、防衛駐在官、総領事館等と緊密な調整を行い、外務省、練習艦隊、在留日本人の方々からの資金的な支援も頂いて、墓碑を再建するとともに、慰霊の言葉と再建の経緯を記した記念碑を建立しました。平成八年六月練習艦隊の寄港を機に、州総督や総領事等の参列を得て、百十四年ぶりの参拝を果たすとともに記念碑の除幕式を盛大に行うことが出来ました。発見から参拝に至るまで終始熱心に協力されたデビッドソン夫妻の厚意と業務の中心となって推進された中村進一郎事務局長の誠意と熱意は、今日も忘れられません。

以上思い出すまま印象の深かったことを記しましたが、それにつけても痛惜に耐えないのは、誠心誠意会長を補佐され、実質的に切り回して頂いた秋山正之理事長と中村進一郎事務局長が、交代後日ならずして相次いで逝去されたことであります。いまさらのようにお二人の献身と功績を偲び、御冥福を祈る次第であります。